筑紫女学園大学リポジト

A Study of Zhou Enlai’s Historical Remains in Japan

メタデータ	言語: eng
	出版者:
	公開日: 2017-12-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/929

日本における周恩来の遺跡の一考察

崔　　淑　芬

A Study of Zhou Enlai's Historical Remains in Japan

Shufen CUI

はじめに

周恩来（1898年３月５日～1976年１月８日）は、中華人民共和国の革命家・政治家。中華人民共和国成立後は国務院総理（首相）を務めた。幼名大鸞（だいらん）、字翔宇、筆名少山・伍豪（ごごう）。江蘇（こうそ）省淮安（わいあん）の名門の家に生まれ、叔父の養子となる。天津（てんしん）の南開中学に学んだ。1917年（大正６）から２年近く、来日して東京・神田の高等予備学校や明治大学政治経済科（旧政治学部、現政治経済学部）に通学。漢訳日本口語文典、明治読本や世界読本などの研究に心血を注いだ。1919年には帰国して南開大学の学生となり、五・四運動に参加した。翌1920年、勤工倹学運動でフランスへ留学、1921年中国共産主義青年団の創立に加わり、翌1922年中国共産党に入党した。パリからロンドン、ベルリン、モスクワ経由で1924年に帰国。1925年、理想的な夫婦像として語られる鄧穎超（とうえいちょう）と結婚。後、黄埔（こうほ）軍官学校政治部主任、党中央軍事部長、第一方面軍政治委員を務め、軍事面での指導者になった。

1949年の新中国成立以来、国務院総理（首相）、中央軍事委員会副主席、人民政治協商会議全国委員会主席等を務めた。1972年には、日本国首相の田中角栄と日中共同声明に調印したことでもよく知られている。

周恩来の一生は、中華の興隆のための留学、中国の解放のための献身であった。人民に総理として仕え、精力と才能、知恵を以て中国外交事業のために不滅の功績を打ちたて、国際的な経済文化交流と各国人民間の友情の発展に、傑出した貢献をなした。その情操は高尚で、人格は立派であった。

本論は、遺跡調査と歴史文献に基づき、周恩来留学の動機、革命家への転身を決意した経緯に

ついて考察したいと思う。

一、日本への留学

周恩来は幼年期を、動乱の社会と家庭の不幸の中で過ごした。九歳の時に母親が亡くなり、二人の弟と共にあとに残された。十年間を、奉天（ほうてん）（現在の瀋陽）の叔父の家に身を寄せて生活していた。そのような苦難の生活の中で、周恩来の強い意志は築かれたのである。1913年、周恩来は天津の南開中学校（現、南開大学）に入学、革命の息吹に触れ、1917年７月、卒業後、十九歳の若さで日本への留学を決意した。その時、南開中学校の理事長、厳修（げんしゅう）からの援助も与えられた。

同年９月出発の前夕、彼は祖国を救い、学問に発奮しようという志を託して七言絶句「大江歌罷掉頭東」を作った。この詩は、後の1919年３月、日本からの帰国を前にして、友人、張鴻誥に送ったものである。

「大江歌罷掉頭東」

大江歌罷掉頭東
邃密群科濟世窮
面壁十年圖破壁
難酬蹈海亦英雄

大江　歌罷（おさ）めて　頭（こうべ）を東に掉（ふりむ）け
邃密（すいみつ）なる群科　窮（ゆきづま）れる世を済（すく）わん
面壁十年　壁を破らんと図（はか）り
酬（むく）われ難くして海に投ずるも　また英雄なり

二十世紀初頭の中国は、軍閥が権力と領地を争うための内戦を繰り返していた。周恩来はそのような国を憂い、救国の道を探すため、1917年９月から1919年５月まで日本に留学した。

明治維新後、近代化に励む日本に学ぼうと東渡した中国の知識人・政治家・留学生などは少なくなかった。日本への中国人留学生が急速に増加したのは、二十世紀初頭からである。その原因はさまざまであるが、直接の原因は日清戦争後の1905年に、一千五百年にわたって続いてきた「登龍門」、いわゆる出世するための試験である科挙制度が廃止されたこともあるが、中国国内における近代的な学校の成立が大きく立ち遅れたという状況もあった。また、中国より三十年も早く近代化に踏み出した日本は、中国に近いため旅費が安く済むこと、日本語は漢字が多く勉強しやすいことが挙げられよう。特に日本には、西洋文化の主たるエッセンスが移入されており、同じ「儒学圏」にある日本的な西洋文化は中国人にとって理解しやすいこともあった。

周恩来が最初留学したのは、東京の東亜高等予備学校であった。この学校は、神田区猿楽町七番地にあった中国人のための有数な予備校である。創立者は教育家松本亀次郎。1914年に中国人留学生のために府立一中の教師を辞め、優秀な教員を集めて東亜高等予備学校を開設した。高い

進学率で一気に有名になり、中国人留学生の三分の二はこの学校で勉強した。1919年、校舎を増設するため現在の神田神保町二丁目に移り、三階建て、五百三十余坪の校舎を造った。

1917年に留学のため来日した周恩来は、第一高等学校と東京高等師範学校の受験に失敗し、東亜高等予備学校(日華同人共立東亜高等予備学校)、東京神田区高等予備校(法政大学付属学校)、明治大学政治経済科（旧政治学部、現政治経済学部）に通学。1918年、東亜高等予備学校の留学生人数は2085名にのぼった。その出身地と人数は以下の通りである。

（表１）東亜高等予備学校における中国人留学生の出身別一覧

地名	学生数	地名	学生数
浙江	247	貴州	46
湖南	200	山西	45
奉天（現瀋陽）	178	陝西	44
広東	175	広西	40
江蘇	142	安徽	38
江西	113	雲南	24
湖北	111	河南	23
四川	102	黒龍江	8
直隷（現河北）	82	甘粛	6
福建	81	朝鮮	9
山東	78	台湾	2
吉林	69	所属省不詳	2
		合計	2,085名

表中、浙江省からの人数は247名で一番多かった。次いで湖南・奉天・広東・江蘇などの順となっている。奉天(現瀋陽)以外で上位を占めるのは、殆んど長江の南部、いわゆる江南である。中国の歴代王朝において、文化・政治・経済の中心を占めるのは都のほかでは、文人などはほとんど江南地域の出身である。肥沃な土地環境と伝統的に文化の発祥地であるため、傑出した人物が輩出したのである。

周恩来は東亜高等予備学校で日本語を学びながら、早稲田大学でも聴講していた。下宿したのは東京都新宿区（当時は牛込区）山吹町の家具屋の二階であった。その時の学習生活について周恩来は、「……毎日四時間の授業があり、午前・午後それぞれ二時間ずつ勉強する。授業に出る時間が早いので、朝は起きてすぐ学校に行かなければならない。朝食をとる時間もないから、毎日、食事を二回にするつもりである。これで朝食をやめられるのは実にいいことだ」と書いている。当時の留学生はほとんどが私費で留学しているが、周恩来もその一人であった。学習と生活両面の費用は非常に重い負担であった。それについて彼は、１月26日の日記の中で次のように述べている。「先月の高先生の手紙によれば、私の手紙を受け取って、私の生活費が不足がちなことが分かったので、教育界で兼職を見つけ、毎月、なにがしかの援助をするつもりだと述べると共に、なぜ詳しい情況を知らせなかったのかと咎めている。この言葉に接し、感激もし、驚きもした」と。周恩来の進学目標は一高と東京師範などの指定校であった。合格すれば官費留学生と

して、学費が中国政府から支給されるからである。彼はこのように強い信念を持って、数多の日本語予備学校から東亜高等予備学校を選んだのであった。

一方、東亜高等予備学校の授業は非常に厳しかった。使用した教科書は、

1．日本語に関する：

尋常小学読本　巻１～６	文部省編
高等小学読本　巻１～２	〃
日本語会話教科書	松本亀次郎著
日本語教科書１・２・３	〃
言文対照漢訳日本文典	〃
漢訳日本語文典	松下大三郎著
明治読本　巻１・２・３	芳賀矢一著
世界読本　巻上・下	池辺義象著
帰雁之蘆	新渡戸稲造著
小説「不如帰」	徳富健次郎著
講評「ナポレオン」	松村伯知講演

2．数学・理科・英語に関する：

算術教科書	菊地大鹿著
幾何三角法教科書	三守　守著
化学教科書	
中学物理学教科書	本多光太郎・田中三四郎共著
分類訳解英文解釈	横地夏吉著
The Word's English Readers NO. 4	
The Word's English Lessons NO. 4	
Standard Choice Readers　（New Edition）	
NO. 1・２・３・４・5.	
By J.C.Neafield Book １・２・３.	
Tales From Shakespeare	

一流の大学・高等学校・専門学校を目指している東亜高等予備学校は教材の選択にも厳しく、必要な科目の教材は校長ら自らが編纂していた。

東亜高等予備学校に留学した留学生は殆ど、有名な大学あるいは高等学校・専門学校に進学した。一部の留学生は欧米の大学に入学したり、中国に帰国して一流大学に合格したりしている。

表２から見れば、東亜出身者の合格率は極めて高かった。1915年（大正４年）は総合格者数の65％、以下1916年58％、1917年69％、1918年74％、1919年86％、1920年は86％を東亜出身者が占めている。注目されるのは1920年の合格者数である。東京高等工業学校（現東京工業大学）と明治法律学校（めいじほうりつがっこう）（現在の明治大学の前身校）に、少数の合格者が出た他

（表２）中国留学生の進学先一覧表

（総：その学校の中国留学生の合格総人数
東亜：東亜高等予備学校出身の人数）

学校	1915年	1916年	1917年	1918年	1919年	1920年
	総 東亜	総 東亜	総 東亜	総 東亜	総 東亜	総 東亜
東京高等師範学校 （現筑波大学）	25 14	30 16	20 13	43 34	45 36	—
東京高等工業大学 （現東京工業大学）	49 30	56 34	57 36	54 41	43 38	37 32
第一高等学校 （現東京大学）	50 35	50 30	50 38	49 26	0 0	—
東京高等商業学校 （現一橋大学）	5 5	9 4	0 0	7 7	5 4	—
千葉医学専門学校 （現千葉大学医学部）	10 3	8 7	8 5	11 8	11 10	—
東京帝大農大実科 （現東京大学農学部）	8 8	0 0	6 0	0 0	0 0	—
東京帝大医大 （現東京大学医学部）	0 0	0 0	0 0	1 1	0 0	—
明治法律学校 （現明治大学）	0 0	0 0	7 6	9 9	9 8	7 6
京都法科大学 （現京都大学法学部）	0 0	0 0	1 1	0 0	0 0	—
その他学校	18 13	23 11	1 1	11 11	6 6	—
合計	165 108	176 102	144 100	185 137	119 102	44 38

王鏡如『周恩来同志青少年時代』河南人民出版社　1980年
王永祥・高橋強『周恩来と日本』　白帝社　2002年により作成

はゼロだったことである。1919年までの進学先は公費留学できる東京高等師範学校や東京高等工業学校及び第一高等学校などであったが、1920年になると進学者が激減している。その原因は主に、日本による対華二十一ヵ条要求をめぐって在日留学生たちの排日運動が昂揚し、日本語学校で勉強中の学生たちが授業をボイコット、帰国する者が続出したからである。また中国国内では軍閥の内戦が激化の一途を辿り、留学公費が不足したことも重要な一因となっている。

周恩来が留学した時は、ちょうど第一次世界大戦の最中であった。世界的な激動、及び日本を含む欧米列強による屈辱的な大陸進出政策が推し進められた時期でもあった。在日中国人の各階層の中でも広範な抗議運動が活発化していた。周恩来もまた、この革命の嵐に身を投じたのである

筆者は周恩来の石碑を探すため、東亜高等予備学校の跡地を訪れた。現在は町の憩いの場所として「愛全公園」となっている。公園の中心に「周恩来ここに学ぶ・東亜高等予備学校跡地」という石碑があり、石碑の左側に「揮毫　汪向栄　中国社会科学院、東亜高等予備学校」、右側には「千代田区日中友好協会　一九九八年七月建立」と刻まれている。

石碑には、「日中両国の人々が敬愛する周恩来元総理は、1898年３月５日に江蘇省淮安に生ま

れました。周総理は1917年（大正６年）に十九歳で日本に留学、この地（当時は神田区中猿楽町）にあった東亜高等予備学校（創立者・初代校長松本亀次郎）で日本語を学び、大学進学の指導を受けました。そのころ、日本政府の対中国政策に反対した松本亀次郎校長の心情にも影響を受け、1919年（大正８年）には帰国して天津の南開大学に学び、新中国の建設に身を投じました。周総理生誕百年・日中平和友好条約締結二十周年にあたり東亜高等予備学校の跡地であるこの場所に、周恩来が学んだことを示す記念碑を、千代田区の歴史の一コマとして建立します。日中友好の気持ちをこめて……」と記載されていた。

二、京都「雨中嵐山」詩

周恩来は東京で勉強しながら、祖国の前途を憂えていた。周恩来『十九歳の東京日記』１月23日の日記によれば、「今朝、『朝日新聞』に載っている日本の昨日の国会の事情、各党派の質問の様子、寺田内閣の各大臣の演説を見て、大きな感慨を催した。わが国は現在まだ国会がなく、臨時参議院は問題にならないので、結局、絶対に解散するべきである。将来の政局は、新国会であれ、旧国会であれ、いずれにせよ能無しである。人民の水準、常識がこんな調子で、どうして優秀な国会などもつことができよう。仕官する者で、真に国家のためを思っている者が何人いるだろう。考えれば実に恐ろしいことだ」と祖国の政局の弊害を批判し、国の将来を心配する心情を吐露している。

この時周恩来は、７ヵ月近く東亜高等予備学校で勉強していた訳だが、革命運動のため学業も乱れ、勉強の時間もあまりなくなり、これは周恩来自身を非常に焦慮させた。

「日本に来てからすでに四ヵ月あまり経つが、日本文も、日本語も少しも上達していないと思う。高師の試験が始まるのを目の前にして、一層力を入れて勉強しなければ」と１月29日の日記に次のように書き綴っている。「引っ越すことを今日決めた。今後は郊外に住むことになるので、おそらく今よりも勉強することができるようになるだろう。さらに、あそこに住めば訪ねて来る人もいないだろう。私一人で、勉強の他に何をすることがあるだろうか？　勉強だ、勉強だ、時間はもはや私を待ってくれはしないのだ」。1918年３月４～６日、周恩来は東京高等師範の試験を受けた。試験の科目は日本語・英語・数学・歴史・地理・物理・化学・博物等八つの他に面接があった。結果は、残念ながら不合格だった。次の挑戦は一高である。

「今後は勉強に没頭する。友人との付き合い、手紙のやりとりは一律に簡単にしなければならず、重要なことを除いて、決して勉強を犠牲にして別のことをやってはならない。俗に『鉄棒も磨けば刺繍針になる』という通り、私の決意さえ堅固であれば、希望が実現しないことはない」と、勉強一筋に進むことを決めている。その学習スケジュールは、「一日は睡眠七時間、勉強十三時間半、休憩その他が三時間半である」と３月11日の日記にある。

周恩来は入試のため、日本語と格闘しつつ官立学校入学を目指して勉学に励んでいたが、1918年５月には、シベリア出兵に伴う「日華共同防敵協定」という協議が成立しようとしていた。こ

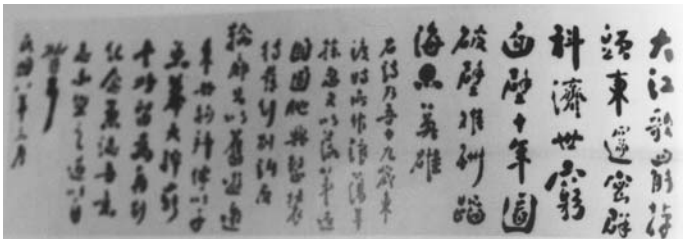
れに対し在日中国人留学生たちは、ただちに救国団を組織、抗議運動に立ち上がった。その抗議行動で授業放棄や一斉帰国を決議する。これらの行動は周恩来に大きな影響を与えた。「一高同窓会が今日行動を起こし、帰国の主張を宣布したが……一高が反乱を起こすなか、指を切って血書するものがいた」。5月16日、軍事協定が締結されると学生運動はさらに激化し、周恩来も連日、集会に参加した。また船から海に身を投じたジャーナリスト彭翼仲（ほうよくちゅう）の死に衝撃を受け、「霹靂（へきれき）一声、『日華共同防敵協定』の軍事協定、亡国奴何故必ず更に生を貪らん」と悲憤の調子で述べている。抗議や帰国の嵐の中で、周恩来の一高入学の願いは叶わなかった。「今日は非常に憂鬱だった。夕飯の後、独りで神田劇場へ歩いていって芝居を見たのは、気晴らしのためだった。しかし現在、家も国も艱難に見舞われ、友人が辛苦をなめているときに、どうして芝居を楽しむことができよう。酒を思う存分飲んで放歌高吟して、胸中の煩悩を追い出すようなものに過ぎない」とは、当時、周恩来の苦悩の心情であった。「試験は失敗した。心が痛み……」と、受験の失敗で、自虐的な気分に陥ってしまう。日本を含む列強の露骨な大陸侵略に対して、日本で勉強するか、革命か、または帰国して勉学を続けて革命か？　21歳の周恩来は苦渋の選択を迫られていた。実際その時周恩来は、京都帝国大学経済学部の受験申請書も提出していたが、革命の気運の高まる中での受験を諦めた。彼は民主主義を唱え、政党内閣制などを主張した大正デモクラシーの理論的指導者である吉野作造を訪問、そこで陳独秀らの『新青年』を読み、「救国」の志を実現させようと思った。

1919年3月、苦悩の中で、ついに帰国し南開大学で学びながら祖国の復興を図ることを決断した。帰国直前の4月5日、ようやく春めいてきた京都嵐山を散策し、「雨中嵐山」という自由詩を作った。

「雨中嵐山」詩

雨中兩次遊嵐山
兩岸蒼松　夾着幾株櫻
到尽処突見一山高
流出泉水綠如許
繞石照人
瀟瀟雨　霧濛濃
一線陽光穿雲出
愈見姣妍
人間的万象真理
愈求愈模糊
――模糊中偶然見着一点光明
真愈覚姣妍

（写真１）
南開中学校時の周恩来



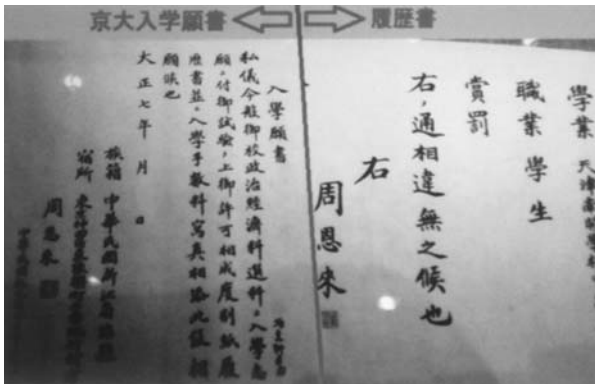
（写真２）詩「大江歌罷掉頭東」

（写真３）東亜高等予備学校

（写真４）松本亀次郎

（写真６）「学校日記」

（写真５）東亜高等予備学校旧跡記念碑
旧　神田区猿楽町七番地
現　神田区神保町二丁目愛全公園にて



（写真７）周恩来の入学願書

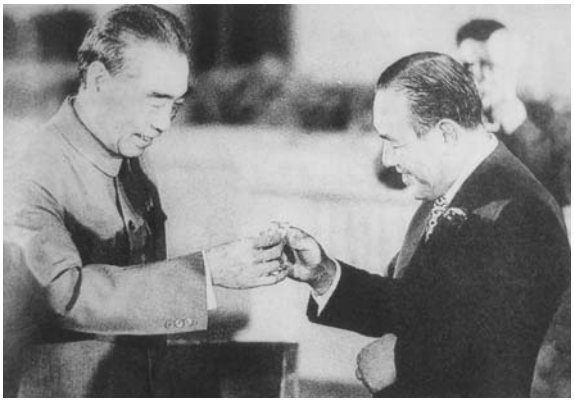
（写真８）「雨中嵐山」詩碑

（写真９）詩碑の裏側

（京都　嵐山内亀山公園にて）

（写真10）革命運動の周恩来

（写真11）国家総理の周恩来



（写真12）中日共同声明調印（1972年）
周恩来と田中角栄の乾杯

（写真13）周恩来、鄧穎超記念館
（天津南開区水上公園にて）

訳文

雨の中　再び嵐山（らんざん）に遊べば、
両岸の蒼松（あおまつ）　幾株（いくかぶ）かの桜まじえつ。
到り尽くる処　突（にわ）かに見る高き山一つ、
流れ出ずる泉の水は緑したたりて、
石を繞（めぐ）りて人を照（うつ）す。
瀟瀟（しょうしょう）たる雨　霧濛濃（もうのう）たるに
一線（ひとすじ）の陽光　雲を穿（つらぬ）き出ずれば
愈（いよいよ）姣妍（あでやか）なり。
人間の万象の真理（ことわり）は
愈求むるに愈模糊（もこ）たり。
模糊たる中（うち）に偶然（たまたま）一点の光明を見れば
真（まこと）に愈（いよいよ）姣妍（あでやか）なるを覚（おぼ）ゆ。

この雨中嵐山詩の中の「模糊たる中に偶然一点の光明を見れば」は、一体、「光明」が何を指しているのか。おそらく、帰国を決意した周恩来は迷ったあげく、ついに新たな人生の道を見出したことを示しているのかも知れない。

日本での留学体験は周恩来にとって、視野を広げ、意志を鍛え、愛国・救国の信念を一層強くさせたに違いない。帰国後、周恩来は革命運動に身を捧げた。

周恩来は帰国して南開大学に入学後、学生蜂起に加わる。その後、更にフランス・イギリス・ドイツに留学して24年に帰国、複雑な中国の政治情勢の中で、一途に革命の指導者として、「光明」に向って歩を進めた。

周恩来は中日国交正常化交渉において、大きな役割を果たした。冷戦下の厳しい状況のもと、対日関係を処理し、中日を国交正常化に導いた。1972年９月、田中角栄首相を招聘し、中日交流の再開に努め、共同声明の調印を成功させた。その過程において、日本人の国民性や風俗習慣を熟知した周恩来の見識が十分に発揮されたのである。中日国交正常化を受け、1978年には日中平和友好条約が締結された。

中日関係正常化において、最も懸案になっていた6000億ドルといわれる経済的損失の賠償金を放棄することについては、「日本の国民は日本軍国主義者の犠牲者である。もし賠償金を求めれば、彼らは再び苦しい目に会う」と周恩来総理は語っている。

1974年には大平正芳外相が訪中し、中日貿易協定に調印している。周恩来総理は在任中、中日国交正常化に大きな役割を果たしたのである。

1979年春、日本国際貿易促進協議会京都総局や京都府日中友好協会などが建立委員となり、中日友好のシンボルとして、京都嵐山の亀山公園に周恩来の「雨中嵐山詩碑」が建てられた。京都の嵐山は、もともと観光名勝地として有名である。嵐山は一般に大堰川に架かる渡月橋を中心と

した地域。この橋を中心に中ノ島公園があり、橋の東北の臨川寺一帯を総称したのが嵐山公園である。渡月橋の赤い橋柱はわれわれ中国人にとって、たいへん親しみを感じるものであった。渡月橋周辺の景色は、四季それぞれに趣のある美しさをつくる。周恩来の嵐山詩碑が建てられてから嵐山は一層中国人にとって名高くなっており、以来、この地は来日した中国要人や一般の旅行者の代表的な訪問地となっている。

筆者が訪ねたのは初秋で、ちょうど小雨の日であった。橋の川上に沿って行くと、右側に亀山公園がある。そこに「周恩来の詩碑」という案内板があり、そこを登ると閑静な平坦地に『雨中嵐山』という巨大な石碑が建っている。濛々とした小雨の中で周恩来の雨中嵐山の詩を読み、当時の周恩来の苦悩が分かるような気がした。まさに雨濛々として霧深い嵐山であった。周恩来は留学を打ち切って帰国後、度々日本のことを思い、機会があれば一度、母校や京都に行ってみたいと思っていたようだ。しかし公務があまりにも激しく、実現することはなかった。そこで彼は鄧頴超（とうえいちょう）夫人に、自分の代わりに日本の旧跡に行ってみてほしいと頼んだという。1979年、77歳の鄧頴超は京都嵐山にできた周恩来詩碑の除幕式に出席した。「周総理は生前ずっと、日本に来て、留学した学校の校長先生や先生たちに感謝の言葉を伝えたがっていました……」と、松本亀次郎の遺族に語っている。また、1993年３月には、中日国交正常化二十周年を記念する「周恩来展・京都展」が、京都府総合見本市会館「パルスプラザ」で開催された。

終わりに

周恩来の一生は、中華の興隆のための留学、中国の解放のための献身であった。人民に総理として仕え、精力と才能、知恵を以て中国外交事業のために不滅の功績を打ちたて、国際的な経済文化交流と各国人民間の友情の発展に、傑出した貢献をなした。周恩来は十年一日の如く、常に勤倹節約、己を厳しく律し、他人に対しては寛大であった。その情操は高尚で、人格は立派であった。日月の如く輝き、江河の如く果てしなく、中国国民と世界の友人たちの心にいつまでも生き続けている。

中国における「周恩来記念碑」は新疆ウイグル自治区石河子農場にもある。それは、1965年７月に彼が農場を視察したことをきっかけとして、1977年７月、石河子農場が記念のために敷地内に建立したものである。高さ12.8メートルで、周囲を松柏と花々が取り囲む。記念碑の正面には「敬愛する周恩来総理、永く不朽の名を残す」と刻まれている。これも中国国民の心の声である。

1972年、膀胱癌が発見され、1976年１月８日、周恩来総理はガンのため北京の305病院で死去した。享年78。彼の死後、民衆は周恩来を追悼する行動を起こし、また、その遺骸は本人の希望により火葬され、遺骨は飛行機で中国の大地に散布された。これらは生前に妻の鄧頴超と互いに約束していたことであった。

1978年に、周恩来が青年時代に学んでいた南開学校を記念館（青年時代館）に指定、その後1998年２月28日に、周恩来誕生100周年記念日の前に周恩来鄧頴超記念館として開放され、天津、日

本、ヨーロッパでの勉学、革命活動に関する文献や写真、さらに彼が使用していた物等が展示されている。

参考資料・文献

（1）『周恩来選集』上・下　外交出版社　1981年

（2）『周恩来語録』秋元書房　1972年

（3）『周恩来日本を語る』実業之日本社　1972年

（4）『十九歳の東京日記』小学館　1999年

（5）『周恩来早期文集』上・下　中央文献南開大学出版社　1998年

（6）王鏡如『周恩来同志青少年時代』河南人民出版社　1980年

（7）李海文『周恩来家世』党建読物出版社・中国青年出版社　1998年

（8）許芥顕『周恩来』刀江書院　1972年

（9）『中外学者再論周恩来』南開大学周恩来研究中心編

(10) 武田勝彦『松本亀次郎の生涯』早稲田大学出版部

(11)『王希天研究文集』長春出版社　1996年

(12) 王永祥・高橋強『周恩来と日本』白帝社　2002年

(13) 金沖ほか『周恩来伝』中央文献出版社　1989年

（さい　しゅくふん：アジア文化学科　教授）